

医療ルネサンス

岡山市の林慎一さん(73)はインフルエンザの流行に備え、今月初め、ワクチン接種を受けた。毎年恒例だ。「もう二度と、あんなつらい思いをしたくない」。インフルエンザの後に肺炎にかかり、生死をさまよったことがある。

2004年2月初め、38度5分の熱を出し、近くの内科医院に行くと、インフルエンザと診断された。解熱薬などにより一度は熱が下がったが、4日後に再び熱が上がってきた。

一日中寝ていても改善しない。翌日は、かかりつけの医院が休診だったので、長男(44)が運転する車で岡山県倉敷市の川崎医大病院まで行った。

待合室のいすに座っていると、意識がもうろうとしてきた。エックス線検査を受けたら、重症の肺炎と分かった。

あなどれない肺炎

. 2 . . .

予防接種二つが効果的



一転病を振り返る林慎一さん、幸恵さん夫妻(岡山市内の自宅で)

治療が開始された。翌日には意識を失い、人工呼吸器が装着された。

「かなり厳しいですね。医師の言葉に、付き添っていた妻、幸恵さん(67)はむせび泣きました。翌日、意識のない夫を見つめながら、「葬儀をどうしようか」と考え始めた。

幸い、入院5日後に目を覚まし、一命を取り留め、約2か月後に退院した。

主治医の勧めで、この年の10月にインフルエンザワクチン、翌月には肺炎球菌ワクチンを接種した。インフルエンザワクチンは毎年二つの予防接種を勧めま

受けているが、肺炎球菌ワクチンと話をしている。

海外の研究によると、両ワクチンの接種者は、接種しなかった人たちに比べて肺炎による死亡率が57%減少した。予防効果ははっきりしているが、二つのワクチンとも自費診療だ。

林さんは以後、高熱や呼吸困難になったことはない。中田クリニック院長の中田さんは、高齢者のほか、心臓、腎臓、呼吸器に病気を持つ人は、インフルエンザの後の肺炎が怖いので、

肺炎の治療に詳しい中田クリニック(東京・内幸町)院長の中田絃一郎さんによると、インフルエンザウイルスに感染した後、肺炎を起しやすい。

気管支内側の表面には、肺炎を引き起こす細菌などを排除するために無数の線

はがれ落ちるなどして、肺炎の原因の多くなる。肺炎の原因の多くは、肺炎球菌という細菌で、ほかに細菌などに比べ、重症化しやすい。林さんも、この細菌による肺炎だった。

すぐに集中治療室に運び込まれ、抗生薬などによる

ワクチン 肺炎球菌ワクチンの費用は、健康保険が適用されないため、各医療機関で異なるが、7000円〜8000円程度。公費補助がある自治体もある。

インフルエンザワクチンは、子どもや高齢者を除き全額自己負担で、医療機関により、10000円程度〜50000円程度。